

27年度版教科書つれづれ 19

「ビーバーの大工事」（東京書籍・2年）の巻

加藤 郁夫（読み研事務局長）

「ビーバーの大工事」は東京書籍・小学校2年（下）の説明文である。かなり前から教科書に収録されており、東京書籍の人気教材の一つといってもよいだろう。今回の改訂で、この教材文にも変化があった。変わったのは、小見出しがついたことだ。

文章は、これまでと同じで20段落ある。漢字とひらがなの表記で変わった箇所はあるが、文章自体に変更はない。ただ、全体が三つに分けられ、それぞれのはじめに次のような小見出しがついている。

1～9段落 〈木を 切りたおす ビーバー〉

10～15段落 〈ダムを 作る ビーバー〉

16～20段落 〈すを 作る ビーバー〉

これまでのものには、20段落の途中に行アキはなかった。今回、小見出しがついたことによって、文章がはっきりと三つに分けられたのである。そして〈木を 切りたおす ビーバー〉〈ダムを 作る ビーバー〉〈すを 作る ビーバー〉とその内容が小見出しにまとめられた。

このことによって、確かに教師は指導しやすくなったといえるかもしれない。おおまかな内容が小見出しに示されているのだから、子どもたちにとって内容把握が容易になったといえる。

しかしながら、今回の小見出しをつけた改訂に私は賛成できない。それは、小見出しをつけたことで読みを固定してしまったからである。

〈木を 切りたおす ビーバー〉とある1～9段落から見よう。1段落は、次のように述べられている。

ここは、北アメリカ。大きな 森の 中の 川の ほとりです。

読んで分かる通り、1段落は場所を示している。「ビーバーの大工事」が行われる場所である。その意味では、〈木を 切りたおす ビーバー〉の一部というよりも、文章全体の場所を示しているともいえる。小見出しを付けたことで、木を切りたおすところに目がいってしまい、大工事が行われる場所の読みとりが少し疎かになりはしないだろうか。

2段落「ビーバーが、木の みきを かじって います。」以降、木を切りたおす様子が述べられている。しかし8段落は次のように述べられている。

ビーバーは、切りたおした 木を、さらに みじかく かみ切り、ずるずると 川の 方に ひきずって いきます。そして、木を しっかりと くわえたまま、上手に およいで いきます。

9段落は、8段落で述べたビーバーの泳ぎの様子をさらに詳しく説明している。

つまり、8・9段落は〈木を 切りたおす ビーバー〉ではなく、〈木を運ぶビーバー〉なのだ。1～9段落に〈木を 切りたおす ビーバー〉と小見出しをつけることで、2～7段落の木を切り倒している様子と8・9段落の切り倒した木を運んでいる様子をきちんと読み分けることがいかにげんになってしまう。

10～15段落は、〈ダムを 作る ビーバー〉とある。ここについては、その通りであるが、さき

ほどの8・9段落の木を運ぶところからダム作りと考えることもできる。小見出しをつけたことで、木を運ぶことまで〈木を 切りたおす〉ことに入れてしまったことになる。結果的に、子どもたちが自分で考える幅を狭くしてしまったことになる。

16～20段落は、〈すを 作る ビーバー〉とある。確かにそうなのだが、最後の20段落は、どうであろうか。

ビーバーが ダムを 作るのは、それで 川の 水を せき止めて みずうみを 作り、そのみずうみの中に、てきに おそわれない あんぜんな すを 作る ためなのです。

この20段落は、〈すを 作る ビーバー〉に入るといふより、「ビーバーの大工事」がなぜ行われるのか、その理由をまとめて説明していると読むべきではないだろうか。木を切り、それを運んでダムを作り、ダムで出来た湖の中に巣を作るといふ、一連の大工事のわけを最後にまとめて述べていると読んだほうがよい。その意味で20段落は、文章全体の「まとめ」になっている段落である。しかし〈すを 作る ビーバー〉と小見出しがつくことで、20段落を全体の「まとめ」の段落とする読みは排除されてしまう。

「小学校学習指導要領解説（国語編）」は次のように述べている。

説明的な文章の解釈に関する指導事項

低学年では、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと、中学年では、目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考えて読むこと、高学年では、目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすることを示している。

（傍線・加藤）

「ビーバーの大工事」は「時間的な順序や事柄の順序」を読み取ることをねらいとした教材である。以前の教科書では、教材のはじめのページに「じゅんじょに 気をつけて 読みとりましよう。」という課題が示されていた。しかし、27年版の教科書ではそれはなくなっている。

このことは27年版にあたって、「時間的な順序や事柄の順序」を読むことへの意識の弱まりを示しているように私には思われる。小見出しに大雑把な順序を示して、ざっととらえられたらよいといった、読むことへの軽視すらうかがえるのだが、どうであろうか。

「時間的な順序や事柄の順序」に整理すると、以下のようになる。

1段落	場所の提示
2～7段落	木を切りたおすビーバー
8～15段落	ダムを作るビーバー
8・9段落	木をはこぶ
10～15段落	ダムを作る
16～19段落	すを作るビーバー
20段落	まとめ（大工事の理由）

このように書かれている順序に従って内容を読み取ることがこの教材の最大の眼目である。しかし、すでに見たように、小見出しをつけることで、子ども自らが読み取るのではなく、小見出しである程度教えてしまうのである。加えて、小見出しに目を奪われてしまうと、木を切り倒すことと

木を運ぶことの違いに子どもの目が向かなくなるのである。

今回の改訂の背景には、「ビーバーの大工事」の読み取りが難しいといった現場からの声があったのかもしれない。それで読みとりを容易にする小見出しがつけられたのではないか、そういった憶測をさせるような改訂である。確かに改訂でわかりやすくなつた。しかし、わかりやすさは必ずしも子どもたちの読む力を鍛えていくこととつながらない。

先に示した「時間的な順序や事柄の順序」を教えるのに最適な教材であるにもかかわらず、そのことをねらおうとはしていないように見える。

東京書籍の小学校国語の27年度版教科書には、それ以前のものとは比べて評価する点も多くある（その一つはすでに「自然のかくし絵」に関わって述べた）。それだけに、小見出しをつけた今回の改訂は残念と言わざるをえない。

終わりに、一つ評価できる点を述べておく。2年生教材なので、文節にスペースを入れて文章が書かれている。これまでは、行がえは特に意識することなく行われていた。その場合、文節の途中で行がえになることも当然起こってくる。たとえば5段落は、次のようになっている。

近よって みますと、上あごの 歯を 木
の みきに 当てて ささえに し、下あご
の するどい 歯で、ぐいぐいと かじって
いるのです。するどくて 大きい 歯は、ま
るで、大工さんの つかう のみのようです。

「木の」が「木」と「の」に、「下あごの」が「下あご」と「の」に、「まるで」が「ま」と「るで」に行をまたがってしまう。スラスラ読めるようにすることも大事な課題である二年生では、文節の途中で行がかわる表記は、子どもたちにとって読みにくいといえる。

27年度版では同じ段落を次のように記している。

ちかよって みますと、上あごの 歯を
木の みきに 当てて ささえに し、
下あごの するどい 歯で、ぐいぐいと
かじって いるのです。するどくて 大きい
歯は、まるで、大工さんの つかう
のみのようです。

行の終わりがきれいに揃わないが、文節ごとにとらえやすくなっている。子どもたちが読みやすいようにという配慮といえる。